

韓国におけるホスピス緩和ケア研修報告

Seoul St. Mary's Hospital Hospice & Palliative Care Center 見学を通して

清水佐智子¹⁾, 益満智美¹⁾

要旨 鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻の3年生6名が、本学の学生海外研修支援事業を受けて韓国で6日間の研修を行った。学術協定校である Chung-Ang University の教員の支援を受けて、緩和ケアをはじめとする保健医療施設の訪問、および同大学での授業参加、同大学病院での実習を体験した。Seoul St. Mary's Hospital のホスピス緩和ケア病棟とカトリック大学ホスピス緩和ケア研究機関の訪問から学生は、特に文化的特徴と看護との関連、韓国の専門職向け緩和ケア教育の実際を学んだ。態度面では、異国の看護に触れることで多くの刺激を受け、勉学に対する意欲の向上がみられた。今回は、韓国での海外学生交流研修で初めての緩和ケア科目での研修であったことから、韓国におけるホスピス緩和ケアの概要と学生の学びを報告する。

キーワード: 海外研修, 緩和ケア, 看護学生, 韓国

緒言

2012年に鹿児島大学医学部と韓国の Red Cross College of Nursing, Chung-Ang University が部局間の学術交流協定を締結した。それ以降、年に1回、学生6~10名と教員数名が相互に訪問して交流を図ってきた。4回目となる今回は初めて「緩和ケア論」の科目で韓国を訪れることとなった。今回の研修目的は、1. 海外の緩和ケアを主とする医療・看護および教育の現状と多様性を理解する、2. 母国語以外の言語でディスカッションする力を身につける、の2点とした。さらに主体性を育むことをめざし、教員は常に学生の希望や工夫を尊重して計画立案、研修活動の支援を行った。

緩和ケアは、患者とその家族の全人的苦痛の緩和をほかり、クオリティ・オブ・ライフの向上を図るアプローチである。特徴として、患者がその人らしく最期まで生活することを支える、を含んでいるが¹⁾、その達成には価値観の尊重が欠かせない。価値観の基盤となるものの一つに文化がある²⁾。他国の緩和ケアに触れることで、特に文化的側面から重視される事柄が理解でき、文化の

多様性や他者の価値観を尊重する重要性を学ぶことができると考えた。今回、韓国におけるホスピス緩和ケアの現状と学生の学びについて報告する。

1. 研修の実際：韓国におけるホスピス緩和ケア

今回の研修は、2016年9月4日~9日に7施設を訪問するスケジュールで行われた。今回は2日目に訪問した Seoul St. Mary's Hospital Hospice & Palliative Care Center と、Research institute for Hospice Palliative Care, The Catholic University of Korea について述べる。

1) Seoul St. Mary's Hospital³⁾ の概要

Seoul St Mary's Hospital は1980年に地域初の総合病院として設立された。2009年に最初の施設から少し離れた場所に、新館が地上22階、地下6階、1,335床でオープンした。旧施設は別館として利用されている。新館は高速バスターミナルや巨大ショッピングモールなどがある交通至便なソウル瑞草区にあり、4,000名のスタッフが勤務している。建物内部1階は病院特有の静粛な印象は

¹⁾鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻臨床看護学講座
連絡先：清水佐智子
〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1
Tel/Fax : 099-275-6769
E-mail: shimizu@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

なく、多くの一般人が通路として利用している様子がみられた。日本語のホームページも準備されている。

Seoul St. Mary's Hospital は韓国における大病院の一つで、世界的な先端医療に取り組んでおり、JCI (Joint Commission International: 国際的医療評価認証機関；世界的な医療のゴールドスタンダード)⁴⁾ や AAHRPP(The Association for the Accreditation of Human Research Protection Programs; 研究倫理審査委員会認証機関；被験者に適切な対応をしていることを示す)⁵⁾ の認証を受けている。日本における JCI 認証施設は、亀田メディカルセンターや聖路加国際病院など19か所あるが⁶⁾、AAHRPPの認証を受けた施設はまだない⁷⁾。ソウル市内だけでなく国内外からも見学の希望が非常に多く、昨年と一昨年は、本学の訪問の承諾が得られなかったとのことである。今回、ホスピス緩和ケア病棟の訪問許可を得られたのは特例であると、同行した Chung-Ang University の国際交流担当責任者である Dr. Hee-Chong Baek より説明を受けた。

2) Seoul St. Mary's Hospital Hospice & Palliative Care Center の概要と研修内容

ホスピス緩和ケア病棟は別館の5階に位置している(写真1)。病棟の教育担当看護師により、病棟概要およ



写真1 ホスピス緩和ケア病棟の入口

びケアの実際がスライドを用いて説明された。その後、看護師長も一部同席し、質疑応答がなされた。日本語が堪能なボランティアスタッフによる通訳があったため、学生にも内容の理解が容易であった。ホスピス緩和ケア病棟の概要は以下である。

1981年に設置の検討が始まり、1988年に10床でオープンした。これは韓国で初めてのホスピスであった。1990年から遺族へのケアが開始された。

2016年9月時点で23床であり、個室7室、4人部屋

が4室、大部屋患者が臨死期になった際に個室対応するための部屋が3室備えられている。

看護師20名(病棟勤務者は17名)、医師4名、社会福祉士1名、チャプレン1名が勤務している。

ボランティアスタッフ60名がケアに携わっている。

ボランティアは病院全体で700名が登録しており、一人につき週に2回程度の活動を行っている。

看護師の活動で特徴的なものは、緊急時の対応を受ける電話サービスを提供していること、家庭への訪問を行っていることである。訪問には医師と看護師のほかにボランティアも同行し、足浴などのケアを実践している。

週に1回、医師、看護師、薬剤師、栄養士、社会福祉士、ボランティアによるチームでのミーティングを行い、情報共有と今後の方向性を検討している。主要な催しは、年1回の遠足とクリスマスである。

遠足は可能な限り全患者が参加している。最期の外出の機会になる可能性を考慮し、患者のほかに家族や親戚、親しい友人など関係者が多数出席する。目的地では、患者が希望を紙に書いて風船につけて飛ばすなど、どの時期であっても希望を支えるケアが実践されている。クリスマスには医師がサンタクロースに扮して患者を訪問し、患者全員とハグを交わすなどのもてなしを行っている。

入院患者の家族への支援として、家族向けの教育が家族単独で個室で行われたり、平日に家族向けの食事がボランティアスタッフにより提供されている。

ホスピス内施設見学の概要

最初に案内されたのは、韓国で初めて枢機卿となった金寿煥(キム・スファン)氏が亡くなった病室であった。2009年に亡くなったが、その部屋は病室としては使われずに記念館として保存されていた。(写真2)



写真2 金寿煥(キム・スファン)氏が最期を迎えた病室

病棟の窓枠は、韓国式の木の窓枠が用いられており、家庭的な雰囲気が導入されていた。(写真3)



写真3 病棟内の様子

日本のホスピスと同様、家族が使うキッチン、談話室や面談室が設置されていた。(写真4)。祈りのための部



写真4 患者家族が使用できるキッチン

屋が設けられており、どの宗教であっても活用することができる。韓国では、宗教者に病室を訪れてほしいという患者が多いことから⁸⁾、ホスピスでも宗教が重視されている。(写真5)

表1 Seoul St. Mary's Hospital Hospice & Palliative Care Center での質疑応答

質問と回答	
Q1	入院患者は、がん患者が多いのか。
A1	現在はがん患者に限られている。小児患者も受け入れの対象である。法律が変わり、今年からエイズや慢性閉塞性肺疾患 (COPD)、肝疾患などほかの疾患を持つ患者も受け入れることになっている。 * 韓国では2011年に72,000人ががんで亡くなっているが、全体の死因の28.2%を占めており、日本と同様、がんによる死者が多いため、がん患者を多く受け入れている ⁹⁾ 。
Q2	伝統的な催しとしてどのようなことをしているか。
A2	韓国式の結婚式を病室であげるなどがある。
Q3	遺族への悲嘆ケアが進んでいると聞いているがどのようなことをしているのか。
A3	お葬式にボランティアが参加する。死後1か月後に看護師が遺族に電話をかけ、状況を尋ねている。その後、死後1年間はボランティアが毎月1回電話をかけて話を聞くなどのケアを行っている。患者全員の写真を撮って亡くなった後には病棟の壁に貼り、思い出として残している。また、死後1年間は毎月1回、家族に病院に来てもらって話を聞く機会を設けている。集団での遺族の集まりを年に2回開催しており、亡くなった人の思い出を語り合っている。この会には死別時期に関係なく誰でも参加可能である。この時の料理はすべてボランティアが準備している。
Q4	日本では遺族ケアは保険の適応ではないため実施が難しい側面があるが、遺族ケアの経費はどうやってまかなっているのか。
A4	すべて寄付によるものである。約1,200名寄付をしているが、多くは遺族からである。入院中に優れたケアをしてもらったため、今後はほかの人に良いケアをしてほしいという気持ちの表れと考えられる。 * 韓国内の多くのホスピスは寄付による支援を受けている。病院基盤のホスピスは国からの保険が下りるが、カウンセリングや延命のための治療、遺族へのケアは保険で賄われない ⁸⁾ 。
Q5	韓国において、在宅で亡くなる人の割合はどのくらいか。
A5	10%程度である。自宅で看取るのを怖いと思う人が多く、病院で亡くなるのが一般的である ⁹⁾ 。
Q6	ホスピス勤務を希望する看護師が働いているのか。
A6	すべて希望者である。ホスピス緩和ケア病棟での勤務に携わる人は、60時間の緩和ケアの基本に関する教育を受ける必要がある。それはボランティアも同様である。

質疑応答の内容 (表 1)

韓国のホスピスの現状や、日本との相違を主に質疑応答が行われた。



写真 5 祈りのための部屋

3) Research institute for Hospice Palliative Care at the Catholic University of Korea の概要 (写真 6)



写真 6 Research institute for Hospice Palliative Care, The Catholic University の入口

研究機関の責任者である Dr. Jin-Sun Yong より質疑応答を主として説明を受けた。所属研究員の英語による通訳を通してやり取りがなされた。

この施設では、学部生への教育も行っているが、主な役割は看護師や医師、ボランティアなど専門職者への教育である。2005年から、ホスピス緩和ケアに携わる医師や看護師、ボランティアは、60時間の基本的な教育を受けることが必須となったため、現在も多くの医師や看護師が受講を希望している。受講するためには、試験に合格しなければならない。より専門的なアドバンスコースも提供している。教育の評価は、満足度調査にて行っているとのことであった。Dr. Yong より、緩和ケアや看護のマインドは世界どこでも共通であることについて説明がされた。

2. 学生の振り返り

参加学生 6 名中 4 名は韓国訪問が初めてであった。海外へ赴くことが初めての学生もいた。海外の施設を訪問することで外から日本を見ることができ、視野の拡大を図ることができていた。質疑応答では積極的に質問しており、進取の精神が発揮されつつあることがうかがえた。研修中の意見交換や帰国後の振り返り、報告書による学びについて、学生の言葉を下記に記載する。

ホスピスにおけるケアの内容は日本と大きくは変わらないと感じた。看護は世界のどこでも同じであることを実感として理解した。

韓国の一般的な家庭に見られる木の窓枠などから、家庭的な雰囲気づくりがされており、最期まで癒される環境が整えられていた。

祈りの部屋の存在から、韓国では宗教が浸透していることや、信仰の自由を尊重していることがうかがえ、価値観を尊重することはその人を大切にすることにつながると感じた。

韓国のホスピスでは、家庭でのケアや遺族ケアが充実していることがわかった。ボランティアの活動が日本と比べて活発であること、多くの活動費用が寄付により賄われていることが印象的であった。奉仕の精神が行き届いていることに感銘を受けた。祖先や年長者を大切にする文化や宗教による影響ではないかと考え、自分自身も奉仕の精神を見習い、ボランティア活動を幅広く実施したいと感じた。

3. 研修の評価と今後の展望

1) 効果

緩和ケアの講義内で、オーストラリアのホスピスの写真を提示しているが、実際に他国のホスピスを訪問すること、母国語以外の言語による説明を受けながら見学することは、学生にとって刺激的で印象深い体験となった。看護師が行うケアや緩和ケアの精神は他国でも同じであるが、ボランティアの活躍や寄付の多さなど、文化の差異や看護への影響を学ぶことができていた。外から日本のケアを振り返ることで、患者や家族の価値観を尊重することの重要性の理解ができており、効果的な研修であったと考える。

2) 今後への展望

病棟説明に用いられたスライドは、韓国語と英語の併記となっていた。さらに、日本語が堪能なスタッフが通訳として手配されていた。Seoul St Mary's Hospital への国内外からの注目度の高さ、世界を意識したうえでの配慮が感じられた。今後は、本学でも英語による案内板や保健学科のパンフレットを作成することが必要となると

考える。それが世界で活躍する人々との交流を促進する一端になることが示唆される。

さらに、今後は世界的な傾向を意識した内容や英語での講義を導入することなどにより、世界を見つめる広い視野をもって看護を考える能力の育成や、海外研修に参加することの意欲が高まることが期待される。

謝辞

ホスピス緩和ケア病棟への訪問調整や計画、同行など、多くの時間を割いて貴重な機会を提供して下さった Red Cross College of Nursing, Chung-Ang University の国際交流委員会委員で鹿児島大学担当の Dr. Bu Kyung Park, 国際交流委員会責任者の Dr. Hee- Chong Baek, Dean Dr. Kyunghee Kim, Vice -President for Nursing Dr. Kap-Chul Cho ほか多くの先生方、スタッフの皆様、訪問施設の皆様、韓国の学生の皆様に深く感謝申し上げます。

文献

- 1) 宮下光令: 成人看護学(6)緩和ケア, ナーシング・グラフィカ, メディカ出版, 東京, 2016: 16
- 2) 日本緩和医療学会: Module5 エンド・オブ・ライフケアにおける文化への配慮. ELNEC-J 指導者育成プログラム Module5 スライド. 2016:5
- 3) <http://www.cmcseoul.or.kr/global/jap/front>. Seoul St Mary's Hospital のホームページ September 18, 2016
- 4) <http://www.jointcommissioninternational.org/about/>. Joint commission international ホームページ September 18, 2016
- 5) <http://www.aahrpp.org/AAHRPP> のホームページ September 18, 2016
- 6) <http://www.jointcommissioninternational.org/about-jci/jci-accredited-organizations/?c=Japan>. JCI-Accredited Organizations のホームページ September 18, 2016
- 7) <http://www.aahrpp.org/learn/find-an-accredited-organization>. AAHRPP 認証機関のホームページ September 18, 2016
- 8) Cheng SY, Suh SY, Morita T, Oyama Y, Chiu TY, Koh SJ, Kim HS, Hwang SJ, Yoshie T, Tsuneto S. A Cross-Cultural Study on Behaviors When Death Is Approaching in East Asian Countries: What Are the Physician-Perceived Common Beliefs and Practices?. *Medicine*2015; 94(39):1-6
- 9) Kwon So-Hi: End-of-Life care in Korea: Issues and trends. 大分県立看護科学大学 第14回看護国際フォーラム. 看護科学研究 2013 ; 11: 54-60

Report on the visit to Seoul St. Mary's Hospital Hospice & Palliative Care Center to learn about hospice and palliative care in Korea.

Sachiko Shimizu¹⁾, Tomomi Masumits¹⁾

1) Department of clinical nursing, School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kagoshima University, 8-35-1 Sakuragaoka, Kagoshima city, Kagoshima, 890-8544 Japan
Kagoshima, 890-8544 Japan

Address correspondence to: Sachiko Shimizu,
8-35-1 Sakuragaoka, Kagoshima 890-8544, Japan
Tel&Fax: 099-275-6769
E-mail: shimizu@helath.nop.kagoshima-u.ac.jp

Abstract

Students in the School of Health Sciences of the Faculty of Medicine at Kagoshima University recently participated in the fourth student exchange program with Red Cross College of Nursing, Chung-Ang University in Korea. This exchange provided the students with their first opportunity to learn about palliative care in Korea. During the exchange program, the students visited Seoul St. Mary's Hospital Hospice and Palliative Care Center, Research institute for Hospice Palliative Care at the Catholic University, and other health and medical facilities. Students learned that cultural characteristics contribute substantially to grief care in Korea. We consider that participation in this program broadened the students' perspectives and increased their motivation to study. We herein report the outline of the study tour especially hospice palliative care in Korea and what students have learned.

Key words: international exchange, palliative care, nursing student, Korea